

Little Dorrit における市場社会の主体欲望

溝 口 薫

Summary

An Analytic Note on *Little Dorrit*: the Market Society and Desire for Self

MIZOGUCHI Kaoru

Dickens's *Little Dorrit* has been often discussed as the author's sharpest social critique because of its relentless disclosure and harsh criticism about the corruptive realities of the contemporary political and business worlds and of the collusive relationships between them. Dickens's elaborate satire against the Circumlocution Office and the business king Merdle is still enjoyable to today's readers. For one thing, Dickens' criticism is applicable today; it is still not unusual to see callous bureaucracy in local or national government offices or a big dishonest business go bankrupt—as we saw with Enron in 2001. For another and more pertinent reason, the novel offers a perspective to deal with the structural ills of the capitalistic society which induces the difficulty of seeing the world and self as people living in its system. Indeed the cognitive confusion or inversion is characteristic of *Little Dorrit*. Many characters in the novel suffer more or less from what René Girard calls the self-deceptive mimetic desire which drives them to seek the superficial self representations the others want without realizing that their soul is displaced and fragmented by the inessential self representations. In this paper, I have examined the inner problem of having this desire, especially in the grotesque figure of William Dorrit and in Merdle's followers, the Barnacles. The novel has a very close thematic organization and the author's insight makes the connection between the self-deceptive desire and the capitalistic code system.

I. ディケンズの社会批判あるいはテキストの厚み

Charles Dickens (1812-1870) の *Little Dorrit* は1855年12月から1857年6月まで作家自身が主宰した月刊雑誌 *Household Words* に連載された長編社会小説である。この作品は、作家の社会小説の中でも、物質的繁栄の頂点にあった社会の飽和と停滞、めまぐるしい発展の陰で進行する社会基盤の崩落の危険を鮮やかに捉えた作家の迫力ある社会的クリティックである。

ディケンズの社会批判は、たとえば the Circumlocution Office 「迂遠省」を中心として展開される行政批判をとってみてもわかるように、一見とても具体的なレベルの批判であるように思われる。物語に登場するこの「迂遠省」とはすなわち、煩瑣な手続と形式主義にこだわっていっこうに仕事を進めない当時の無責任な行政機構にディケンズがあてこすった風刺的提喻だが、文字通り「たらいまわし」を専門とする行政の中心的役所なのである。いかなる事柄もこの役所を通らないことはなく、にもかかわらず、いかなる処理も滞らせ、国を沈滞ムードに陥れ、あまつさえ多くの国民を行政の遅延で破滅させる。“HOW NOT TO DO IT”（「いかにして仕事をしないか」 Bk 1, chap. 6）¹⁾をこの役所のモットーだというのは、ディケンズ一流の皮肉なのであるが、ことほどさように無責任に胡坐をかいた本末転倒の機構なのである。

この批判が当時トピカルなものであったことは、この作品が完成する前年によく終結したクリミア戦争（1853-1856）の悲惨がまさにイギリス行政機構の無責任な機能不全が原因であった事情を思い出せばよい。だが、この停滞、官僚主義が一向に改善されないのは何故か。表面的に見れば、官僚の「いかに仕事をしないか」式の尊大な無責任体質のほか、高級官僚、政界、財界、国教会、法曹界、上流社会と、つまるところ支配階級が癒着しているからといえる。Barnacles 一族は、その代表で、いずれもその名のとおりに、「フジツボ」のように無為徒食（フジツボに失礼だが）であるのに行政機構という船の見えない裏底に群生して、世襲制や縁故で政、官等に地位を手に入れ、一族郎党であらゆる権益をむさぼっているのである。筆頭は、貴族院議員である Lord Decimus Tite Barnacle デシマス・タイト・バーナクル閣下であるが、彼の名が暗示するところによれば、まるで「十世代」にわたって「がっちり」と公を私してきたかのようにさえある。彼らが引き起こす被害は、主人公アーサー・クレナムに及ぶなど、あまりにも明らかであるにもかかわらず、支配階級の権威と尊厳を保つ威圧的な沈黙の固い殻は一向壊れないどころか、むしろその守りは堅く、バーナクル一族のなかでも特に弁のたつ Ferdinand Barnacle などが放つ如才ない弁舌で事態の様相は黒から白へと転換させられてしまい²⁾、かくて、小説は、一方で鋭い風刺的語りが虚偽とそれを隠蔽する政界の腐敗を暴きながら、同時にそれがなかなか白日のもとには出てこない黒白の分かちがたい世界を提示するものとなっている。

もう一つ、この作品でディケンズが批判している社会領域は、まさに大発展が進行中の経済社会である。それは次々に成功する投資を行い、傘下に種々の会社を吸収し、いまや一巨大企業の主として「ロンドン経済の奇跡」とも「現代の英知」ともいわれる経済界の大立者 Merdle

氏をその中心におく社会相である³⁾。彼は個人としては、影の薄い、寡黙な個性のない人物であるのだが、いつも、いかにも華麗豪華な背景の中におり、さらに彼を崇拜する愛想のよい取り巻きに囲まれ、イギリス社会の繁栄の象徴ともいえる景気のよい話題が展開するその只中にいわば奇妙に空虚な中心としてたつ人物である。そのような彼がある日突然自殺、そして俄かに彼と会社の実態が露見、マードル関連株が大暴落する。その結果、彼とよしみを通じて潤おうべく取り巻いていた上記の政治家、官僚、国教会、法曹界、社交界、すなわち支配階層集団は、もろとも大打撃を蒙ることになる。上流社会の面々ばかりではない。バーナクル閣下などが、公の席で「マードル氏について、巨人的企業精神、イギリスの富、柔軟性、栄誉、資本、繁栄その他ありとあらゆる賛辞を呈し」(Bk 2, Chap. 24) たりするものだから、ついにクレナム他末端の一般人まで「本物の」「安全な株」(Bk 2, Chap. 13) と信じ、なけなしの金をつぎ込んだ挙句、破滅に至るのである。

国会に一議席を占め、爵位まで授与されようとしていた、つまりは世の頂点を極めようとしていた矢先にマードルが自殺するのは、彼の会社の資金繰りがついに行き詰まったことが原因であった。だが、この企業主、そもそも帳簿の改ざんなどによる不正な手段で投資会社の上向き成長のみせかけを作り、その上で会社の株値を吊り上げ利鞘を稼ぐなど、要するに財政の不正操作によって巨大企業に膨れ上がった、もとよりなんら実体のない虚業家だったのである。しかし、これまた上記の「迂遠省」と同様、奇妙なことに、その語りが彼の空虚さを何度も繰り返して暗示するにもかかわらず、その虚像は自己崩壊するまで、決して小説世界のなかでは明らかにはならない。それは、マードルが、政界、社交界、法曹界、教会関係者その他に派手にばら撒く「見せ金」と見せかけの業績、さらにそれらに吸い寄せられた上記社会的権威たち取り巻きの公式的高揚によるのだ、といえれば一応の説明はつく。しかし、後に見るように、たとえ彼の取り巻き連であっても、その心のなかを探ってみるならば、彼を崇めなければならないなんらの実質的理由も発見することができないのである。にもかかわらず、人々は「マードル信仰」に陥る。このように見てくると、この作品において、ディケンズの告発しようとする社会の問題は、具体的な社会制度や機構に対する批判というより、もっと大きな基本的な問題が問われているように見える。この二つの例をみただけでも、そこには、虚像と実像の転倒あるいは揺らぎ、という認識に関わる根本的問題が隠されているとはいえないか⁴⁾。

最近米国のとある IT 関連巨大企業が、同様の財政の不正操作で虚偽の成功発展を取り繕い成長した挙句、やがて破綻し倒産の憂き目をみた事件を知る現代の読者にとって、マードル株大暴落事件は、はっとするほどリアルな問題にみえる。こうした今日的にも意義深い具体的社会的問題が、真正面から取り上げられ、なおかつその腐敗の様相が痛快なまでに活写され華麗に批判・諷刺されるディケンズ小説は、事実テキストの表層だけ読んでも十分に楽しめる。しかし現代の読者がその作品にひきつけられるのは、むしろ経済や政治の制度自体や成員の墮落という表層レベルの意味を超えて、物質的に繁栄する社会に生きる人間が嫌厭なく陥る認識の混乱という、精神的根本条件に関わる資本主義社会の問題が、社会と個人の内面を貫通する垂直的想像力のもとに捉えられているからであろう⁵⁾。

Ⅱ．主体欲望と市場社会

実体を虚偽と見誤らせ、虚偽を本物と捕らえる認識の混乱を作り出すものが社会と人間の内面を貫通するある基本的な関連構制にあるとみていたとしたら、ディケンズはそれをどのような視角から捉えていたのだろうか。それを知る一つの手がかりは、「欲望」であろう。ただし、それは、たとえば食物など対象に単純に直線的に向かう欲望というより、近代以降に特徴的な、主体の欲望、自分自身についての欲望である。

ジラールは、自己についての欲望の危険性とそれについての芸術家の認識を、近代以降の一連のヨーロッパ小説のなかに精密かつ横断的に跡付け、この精神の形式を西洋近代精神の根幹にかかわる社会学的かつ心理学的な問題として提起しているが、彼によれば、現代社会が落ち込んでいる種々の虚偽の源に、人々の心に根深く根を下ろしているこの虚栄的欲望の形式があるという。それは端的に言えば他者の欲望の欲望であり、それは、本来的自己を強く求める力がないために、いわば代替として欲せられる模倣的欲望である。またこの模倣的欲望が欲する自己表象は、自己存在にとっては本来的ではなく、かつ求めるものがいわば表象であるという意味において、自己にとってそれは常に分裂的、断片的なもので、したがって、つねに完全な満足にいたることがない。このために、この表象欲望に囚われた自己は、同じ欲望に駆られ続けるという循環性をもつ⁶⁾。

さらに、この欲望は欲望する表象を、本来唯一の自己として幻想させる力を持つ。ジラールによると、この自己についての形而上的欲望が顕著になってきたのは、あらゆるものをあたかも商品のような単純な価値、表象に転化させてしまう近代以降の市場のための生産構造、および自己を唯一無二の存在として中心化するような個人主義思想が原因しているという⁷⁾。すなわち本来複雑多様な存在としての自己を単なる表象へ還元を欲望が顕著になるのは、市場のために商品が大量に生産され、金銭を媒介とする等価交換によって所有がいつも簡単に実現される市場社会にあって、自己も商品と同じような記号とみなされるようになったゆえだともいえるであろう。また、この模倣欲望は、あらゆる他者を脱中心化する。平板な表象を空虚な核として中心化する中空的意識は自己の内にも外にも他者を認めず、従って非現実的転倒的認識を許容してしまう。

さて、この作品においては、名前が明示されているだけでも30数名にわたる登場人物がいるが、その代表、William Dorrit や Clennam 夫人、Wade 嬢などは、自己についての虚偽の意識に囚われている、あるいは自己幻想と覚醒の境界を不安定に行き来する神経症的な人々であり、この危険な欲望による内面の被害を顕著に表す存在となっているように思われる。本論ではまず、ドリット氏を取り上げ、その内面の分析を試みる。彼がいかなる認識の混乱に陥っているのか、それは彼のどのような主体欲望のゆえに引き起こされているのか、そして主体の欲望とはいかなる凶々しさをもつものなのかを検討してみる。また、先に見たマードルを囲む集団の内面意識を探る。バーナクル一族は、特に上記のような存在と比べて、顕著な病的症状をもっていないようにみえる一見普通の人々である。しかし、実は、彼らと同根の欲望の問題が提示されていることを示し、この作品の緊密な構成の一端を確認するつもりである。

Ⅲ. ドリット氏の主体欲望

ウィリアム・ドリット氏の欲望が、一つのサンプルになりうるのは、彼が自分は紳士で家父長であるはずだという欲望を持つのが、まさに彼が自分の無能無為に気づいた時点から始まるということによる。すなわち、彼が家父長紳士としての自分自身にこだわるのは、実は彼がそれを欠いた存在であるということを認識しているがゆえなのである。面白いことに、彼が実際に紳士で商社長として一家をなしていたときは、彼は自分が何者である課などということは露ほどにも考えていなかった無邪気な人物であった。「履行されない契約書にサイン」(Bk 2, Chap. 12)があったために、全財産を没収され、あまつさえ債務者監獄につながれる身となったのであるが、彼は、その理由もわからなければ、その事態の意味についても理解できないほどの、軟弱な人物であった。収監されてからほどなくして身なりや手持ちの金に不自由するようになって、ようやく自分が社会の失敗者となり、また娘 Amy に養われる無能の存在として父親としても失格であるということがわかってくる。彼は、自分に欠いているからこそ、そして自ら手に入れる気力を持ち合わせていないからこそ、社会的優越の表象、家父長紳士のイメージを切望することになるのである。

ドリット氏の欲望ほど、この主体の欲望自体の非本質性・安直性、虚偽性、その表象自体の平板性をよく示すものはないだろう。彼は無為徒食を恥じて自分が陥っている事態を改善する努力を一切なすことなく、生涯を幻想に逃げ込んで暮すからである。ただ、彼の罪は幾分か減殺されよう。彼がもし書類にサインさえしなければ、また自尊心を破壊させるような残酷な債務者監獄、刑罰のシステムなどがなければ、彼がその惨めな欲望に囚われることは、あるいはなかったかもしれない。そう考えるならば、彼が社会のシステムの被害者と言い切れないものでもないのである。

興味深いことに内実の乏しい覇気に乏しいはずのウィリアム・ドリットの欲望は、本人の性格の弱さには似合わぬほどに、執念深く、かつ、根深い。彼の人生への取り組みの弱さに比して、彼の紳士としての自己表象への執念は凄まじい。ドリットがあくまでも固執するのは、家族に対してだけでなく、監獄コミュニティに対して悠揚せまらぬ元紳士として「家父長」らしくあるという自己イメージの保持である。彼はそのいかなる内実も奪われた最低の存在であるからこそ、それだけ優越的な紳士たる自己イメージにこだわるのだが、彼は自分を家父長だと思わせるどのような根拠もないままに、彼はそれを自己演出と自意識の抑圧によって支え続けるのである。彼の「儀式」とは現実に気づかないふりをする自己欺瞞の装置なのである。たとえば彼が入所したての新人の前でマーシャルシー監獄の「長老」として紹介されると、いかにも紳士然、家父長然として挨拶を受ける。つまり、上品で丁重な言葉づかい、優雅で紳士らしい身振り、父親が家族に示すような保護者然とした態度、その一つ一つが彼にとっては、家父長のシニフィアンであり、周囲がそのように受けとることを当然とする。しかしそのシニフィアンを、彼の望むシニフィエとして受け取るのは、彼のみだけなのであって、周囲の人々は、むしろ単純に同情し調子を合わせているだけなのだ。だが、彼は、周囲の同情という現実を受け入れ難く、彼に食べさせる娘の苦労同様、完全に無視してはばからない。

彼が演出する、現実とは逆様の演劇空間、自閉空間は容易に破られうる脆い空間である。さらに見事な一連の出来事のうちにそれは描き出されている。ドリットは、短期間で出所する人々からは、金品をねだりながら、それを「長老」に対する敬意とその庇護に対するお礼の「寸志」として受け取っているが、一方で他人に金をねだりながらその惨めな現実を家父長の威厳と温情の記号表徴をちりばめてまんまと小遣い稼ぎをするのである。彼の儀式も彼に同情した周囲の人々の精神的物質的寸志でようやく成立する。たぶん、短期で出所できた喜びから、つい鷹揚になった人々はあるかぎりの惜しみない同情のしるしを手渡すのであるが、彼にとって、家父長の体面を保つ金額は、「1、2 シリング以上」なのであった。たまたまこの演劇的空間の意義を解さぬ無粋の輩が「寸志」をけちると、彼の幻想空間はたちまちにして破れ、彼が物質的にも精神的にも他者の施しにすがって生きる最も惨めな社会的敗残者であるという正体を見せ付けられ、束の間悲嘆にくれることになる（Bk 1, Chap. 6）。この事柄が指し示すのは、彼は自分の現実を知らない訳ではないという希望である。しかし彼の意識はそこからずりりと逃走してしまう。

彼においてほど、ディケンズの模倣欲望の虚偽性と自己分裂の根深さを、グロテスクに描きえているものはない。そしてまたその恐ろしさを見せ付けるものもないであろう。小説の後半において、ドリットは、かつてをしのぐ巨万の富を相続し、ようやく牢獄を出、あれほど戻りたかった紳士として家父長として、社会へ華々しく復帰する。巨万の富、豪華な衣服、馬車、人々の掛け値なしの賞賛、贅沢なヨーロッパ旅行、どれをとっても彼を裕福な本物の紳士とみまがうものは誰もいないのに、すべてを取り戻しても、彼は自分に安心できないのである。過剰なまでに紳士の記号を世間に撒き散らし、本物の紳士であることをことさらにアピールするものの、彼は牢に収容された過去の露見を恐れて自己と和解することはできない。かくて彼は自分では確信できない華々しい自己イメージに執着する他はない。とすればそのことが示すのは、いったん虚栄の欲望に横断された精神は、そのもともとの欲望が発生した事情が取り払われても、その爪あととはそう簡単には消え去らないということである。事実、模倣的表徴に囚われた（すなわち自己を固定的かつ中心化している）永久に満足を与えないこの欲望形式は、欲と絶望、幻想と幻滅の循環を通して、その内面を消耗させ、ついには存在自体を崩壊に至らせる。老衰したドリットはお歴々が居並ぶ豪華な晩餐の席で、突如現実を見失う。いまや彼の眼前に見えるのは、そこにはないはずのマーシャルシー監獄であり、彼は、欲望の燃料を切らしたかのように、もっとも秘匿すべき卑しい自分自身へ、最も惨めで弱々しい本来の自分に戻ってしまう。これは大いなる皮肉である。なぜなら彼は欲望を失って、ようやく幻想から解放されたが、そこから出発すべきであった自己へと戻っていったのは、死の間際であったからである。

IV. 集団的主体欲望——迂遠省の人々の場合

さて次に、マードルをめぐる認識の混乱に陥った彼の取り巻きたちの意識について、検討してみよう。かれらは以下に見えるように迂遠省のバーナクル一族に集約される。引用するのは、

語り手が、マードル崇拝の内実、そしてその意識の内側を抉り出していると思われる箇所である。少し長くなるが重要なのでそのまま引用する。

The famous name of Merdle became, everyday, more famous in the land. Nobody knew that the Merdle of such high renown had ever done any good to any one, alive or dead, or to any earthly thing; nobody knew that he had any capacity of utterance of any sort in him, which had ever thrown, for any creature, the feeblest farthing candle ray of light on any path of duty or diversion, pain or pleasure, toil or rest, fact or fancy, among the multiplicity of paths in the labyrinth trodden by the sons of Adam; nobody had the smallest reason for supposing the clay of which this object of worship was made, to be other than the commonest clay, with as clogged a wick smouldering inside of it as ever kept an image of humanity from tumbling to pieces. All people knew (or thought they knew) that he had made himself immensely rich; and, for that reason alone, prostrated themselves before him, more degradedly and less excusably than the darkest savage creeps out of his hole in the ground to propitiate, in some log or reptile, the Deity of his benighted soul.

Nay, the high priests of this worship had the man before them as a protest against their meanness. The multitude worshipped on trust—through always a distinctly knowing why—but the officiators at the altar had the man habitually in their view. They sat at his feasts, and he sat at theirs. There was a spectre always attendant on him, saying to these high priests, “Are such the signs you trust, and love to honour; this head, these eyes, this mode of speech, the tone and manner of this man? You are the levers of the Circumlocution Office, and the rulers of men. When half-a-dozen of you fall out by the ears, it seems that mother earth can give birth to no other rulers. Does your qualifications lie in the superior knowledge of men which accepts, courts, and puffs this man? Or, if you are competent to judge aright the signs I never fail to show you when he appears among you, is your superior honesty your qualification? Two rather ugly questions these, always going about town with Merdle; and there was a tacit agreement that they must be stifled. (Bk 2, Chap. 12, my underline)

マードルという有名な名前は日に日にこの国で有名度を増していった。これほどの名声を得たマードルが、生者と死者を問わず誰かに、あるいはこの世の誰かに対して何らかの恩恵を与えたことがあるのかどうか、誰も知らなかった。アダムの息子が足を踏み入れた迷宮のどこかの通路の中の、義務か娯楽の道、苦痛か快楽の道、労働か休息の道、事実か空想の道、それらのどれかの上に1文蠟燭ほどのかすかな光すら投げかけるような能力や言説を彼が持ち合わせているのかどうか、誰も知らなかった。この崇拝の対象を作り上げている素材が並みの人間の素材と同じで、その中でほそほそとくすぶっている火種は、やっとな人間の姿を解体から救ってくれている程度のものと想像して間違いがないのかどうか、誰も知らなかった。誰でもが知っ

ている（あるいは知っていると思っている）ことは、彼が自らの力で大金持になったということ、それだけの理由で誰もが彼の前で、無知蒙昧な野蛮人が地面の穴から這い出してきて、迷信から作り出した木か蛇の神のご機嫌を取るとき以上に卑屈になって、何の理由もなしにひれ伏している、ということだ。

いやそれどころか、この金権崇拜の高僧たちは、自分たちの卑屈さへの抗議のしるしとして目前に御大を据えているのだ。一般大衆が崇拜するときには——いつもその理由をはっきり知っていたとしても——いわば信用取引で崇拜しているのだが、祭壇で儀式を行う高僧たちはいつも目の当たりにその相手を見ている。連中は、彼の宴会の席に列なり、彼も連中の宴会に列席をする。彼のいるところに、かならず幽霊がついて周り、高僧たちにいうのだ。「お前らが信用し、好んで尊敬するしるしはこんなものなのか、この頭、この目、このしゃべり方、この男の態度や調子がそれなのか。お前らは迂遠省のハンドルであり、人民の支配者だ。お前らの5、6人が、掴み合いの内輪喧嘩を始めても、それに変わる支配者を大地は生み出してはくれまい。お前らの資格とは、この男を受け入れ、この男に媚びへつらい、この男をいい気にさせる人民をよりよく知っているということなのか。それともこの男がお前らの間に現れ出たときにわしが必ず見せてやる印をお前らが正しく判断できるとするならば、お前らの選りすぐれた誠実がお前らの資格なのか」これはマードル氏のいくところ常にロンドンで問われるかなり不快な質問で、この問いがでないよう押さえつけねばならぬ暗黙の協定が成立していた。(Bk 2, Chap. 12, 下線筆者)

反復強調を重ねるこの語りから、まず明らかなのは、マードルを崇拜する人々の心には、いつも崇拜という感情とは正反対の疑念、不安が去来していたということ、そして、かれらは、この思いを、いつも、押え込み、そ知らぬふりをして、崇拜行為をし続けていたという欺瞞である。だが、彼らは、それらを、単なる彼らの内面感情の分裂や不分明な事柄からの逃避としておこなっていたわけではないであろう。この語りは、一見外から彼らの内面を客観的に語るようできて、実は、彼らの内面に分け入って心に流れる思いのままにその内実を明らかにする半描出話法的である。いかにも自己と他者の輪郭をぼやかす語りであるが、そのあいまい性を超えて浮かび上がるのは、ウィリアム・ドリット同様の、彼らの外界に対する感度の悪さであり、自己表象をめぐるある種の精神の自動形式ではなかろうか。そもそも彼らが疑問に思い、不安になっているのはマードル自身についてなのだろうか。上記の最初の段落で、彼らは、「マードルの徳や知にかんする実態を何も知らない」という。もし知らなくて信用できないのであれば、なぜそうしたマードルの経歴や業績に関する疑念を調査して晴らさないのか、なぜ彼らは真偽を正す行動に駆り立てられないのだろうか。また、後段において、マードルを眼前に見てさらに崇拜する根拠のなさが明らかになるにつれて、彼ら自身が「不快」になるのはなぜだろうか。

この段落は一見かれらのマードルをめぐる内省であるようできて実は鈍いフィルターのかかったような自意識の反芻を通して欲望に支配された内面を物語るものである。最初の段落

は、彼らは自らがマードルを崇拜するに足る根拠がないことに不安を覚えている部分であるが、実際は、彼らはマードルの業績のあるなしを疑っているのではなく、むしろマードル自体には興味がないといってもよい。強く惹かれているのは、そのあとにあるように、「彼が自分の力で大金持ちになった」という言葉、マードルが持つ強い表象になのである。ただ彼らは、自分のそうした感覚にほんやりと不安を覚える。なぜ、実体をしらなくても、言葉に惹かれるのか。先にみたように、マードルはなんら特徴ある実績のない人であった。現実感覚とは不均衡なまでに強い吸引力のある表徴と、理性的な認識の間で宙づりとなり、彼らは不安を覚えるのである。なぜこのような存在を崇拜するのか？だが、彼らがマードルを崇拜することの卑屈さを感じるや、いわば自己の卑しさを覆い、否定するものとして、マードル崇拜に傾くことがわかる。後段の「幽霊」とはいうまでもなく自分の行為をみる自分であるが、まさにこの一連の箇所は、マードルを巡る彼らの欲望がもう一人の対象化する彼ら自身を抑圧する過程が描かれているといえよう。

彼らが、崇拜するマードル記号のかなたに見ているのは、自分自身であり、マードル自体ではない。そのように考えるなら、なぜ彼らのマードルの虚偽性についての反応が鈍いのかの理由もよくわかるのである。マードルは、自らを信頼にたる資本の権化として過剰な記号を流しているのだが、その記号体系を読み取るときのみ、彼らの欲望が満たされるように思うのだ。前者の記号連関、周囲の欲望を刺激する強さは、それだけ強力であるということだろう。マードルが彼らに好ましい表象であるのは、「自立性」と「大金持ち」であるが、それらは19世紀ロンドン資本社会のきわめて重要な主体の表象であったのである。この二つの言葉に代弁されるような模倣モデルを大量に生み出し人びとがこぞって模倣していたことは、1851年に出版された Samuel Smiles の *Self-Help* (『自助論』)、その売れ行きにも明らかである。

個人がそれぞれ「唯一無二の価値」を手に入れることは市場における自由競争というコンテクストのなかでは難しい。従ってより価値ある自分自身であるために、社会に浮遊するさまざまな有利な自己モデル像——名士、天才、権威、重鎮、金持ち、紳士、家父長、など——を「所有」しようとする。市場のために商品が大量に生産され、金銭を媒介とする等価交換によって所有行為がいとも簡単に実現する市場社会の自己は、あたかも商品をもとめるように自己表象を欲望する。資本社会のなかで欲望は、切り売りされるかのように幾多の平板な表象となった対象の断片を、意味ある記号として暴力的に自分のものとする。彼らバーナクル族はまさにウィリアム・ドリットと双子なのだ。

二段落目の中断に、この取り巻き連が自分自身の実情を振り返る部分がでてくるのは理由のないことではない。彼らもまた、巨大化し、細分化した組織のなかで、取替えの聞く「レバー」としての自己存在の軽さ、卑小さに苦しむ存在なのである⁸⁾。彼らが、崇拜に値しないかもしれない、マードルに卑屈にかがんでいる自分自身に敏感であるのは、この世に自力で最高の金権を握った、強力な傑物の先に自己表徴をみるほどに自尊心に飢えているからに他ならない。こうした卑屈で尊大な内面こそ、彼らの認識の混乱を招くものといえよう。

このエピソードは空虚な自己を量産する近代市場社会の記号体系、表象以外にどのように欲

望が維持されるのかをよく示す。今見た限り、その理由の一つとして、個人がその内面の現実に見合った欲望を引き出しにくい体制にあるということが考えられる。たとえば、巨大な組織のなかの歯車のひとつとしてしか自己を認識できないような、迂遠省のような専門細分化した組織構成、縁故就職等で人生を保証される体制、あるいは、自らの虚偽性と現実について省みる機会も価値もみとめられない表層的な社会であること。

ドゥルーズによれば資本社会は、欲望を大量に産出する種々の機械を多様に増殖させる社会なのであるという。そのさまざまな機構は、そのような社会に生きる人々の欲望を取り込み、発動させ、人々そしてさらに欲望を創出、駆動、増殖させるという。資本社会においては、魅惑的な記号コード、あるいはシニフィアンは、たとえば「金」「富」「成功」「紳士」「英知」「優越」「上品」など、次々と前者が後者のあるいは後者が前者のシニフィアンとして機能するような記号のネットワークを形成しており、この記号連関に落ち込むとき、人は望むシニフィエを手にいれたかのような幻想に陥るのである。とすれば、マードルをめぐるこのセルフメイドマンという記号連関を筆頭に欲望の記号に満ちた *Little Dorrit* の世界は、自己にとって本来的な生き方とは別な空疎な自己表象を追い求める資本社会の陥穽のありようをよく物語る小説ということになる。

注

- 1) Dickens, *Little Dorrit* (Hammondsworth: Penguin, 145) 以下英文の引用は、この版により、文中に巻、章番号を記す。なお日本語訳は小池滋（『リトル・ドリット』ちくま文庫）により、場合によって若干書き換えを行っている。
- 2) ディケンズが迂遠省にかかわる個々人の公的責任への無関心、無責任性を批判するためにだけ、彼らを描写しているのではないことは、あらためていうまでもない。より目覚めたバーナクルの一人が指摘するように、この増殖しすぎた行政機構に構造改革のメスをふるうことは「個人が立ち向かっていっても、潰されるのがオチ」の暴挙なのである。だから責任感をもって何とか構造上の変革を求めるのは、誰も、望むなという考え方となる。つまり道徳的責任の問題は、生命の危険にかかわる問題に摩り替わり、かくて誰も敢えて、規制の組織を変革しようとは思わない。だが、ディケンズが、もっともその意識のありようの元凶とみているのは、結局、公共道徳の有無を云々する問題ではない。それ以前の問題なのだ。
- 3) Merdle がフランス語の *melde* (糞) を連想させるとの指摘は、さらに投機経済のカラクリへの痛烈な皮肉を的確に読むものである。また、黄金の反転像としての糞というイメージは、後に示す、彼の小説世界における両義性、幻想と実像の混在する表象にあふれた都市のイメージとしての的確である。松村昌家『ディケンズの小説とその時代』（研究社出版、1989年）。
- 4) 「見ること」について問う論考としては、新野緑『小説の迷宮』（研究社出版、2002年）参照。
- 5) たとえば、上記の行政機構や投機という問題を、族議員や縁故就職制度による経済界や社交界の馴れ合い、癒着具体的な社会体制、制度上の問題とみるのではなく、また関係する個人や集団の道徳的な問題としてみるのではなく、役所に勤める個々の内面の意識、とりわけ、自分自身をどう欲望しているか、という視角から捉えることをさす。作家の批判を、行政や経済活動にかかわる具体的システムの問題、また個人あるいは集団の社会道徳観という観点から見るとは、それぞれの理由により、ディケンズの今日にも通じる特質を説明する方法としては当たらない。実際、もしそのような観点に集約される表象としての社会像、人物像のみをディケンズが提出していたら、今日彼の小説は大きな感動も意味も呼び覚ますことはなかったであろう。それほどこの小説におけるディケンズの視

点は、極小から極大へあるいはその逆を自由に疾走し、社会の俯瞰図を提供する。

また中期以降のディケンズ作品に顕著なテキストの複雑な厚みは、時代社会の諸機構というマクロな問題と個人の内面のミクロの問題が実は同根のものとして扱い、それはあたかも同一の主題の変奏として多様に重層的に展開されていくことによる。社会や経済の諸機構の実際について事細かな事実的説明をすることはなく、いわばそのエッセンスを掴みとり、それを主題にしたがって展開してゆく方法は、ながらく作家の社会的リアリティに欠ける部分としてみなされてきたのであるが、じつはそうした認識能力こそ作家の作品の今日的意義の中核をなす。

- 6) 別の言い方でこの主体欲望について述べるなら、欲する表象をあてがう力を持つリビドーであるともいえるだろうか。この欲望は欲望と引き合う記号体制ないしコードに自己を強く引き込む力を持つのである。欲望についての論考の歴史は、ヘーゲルに始まり、フロイト、ジラール、ラカン、ドゥルーズ＝ガタリと発展してきている。本論は、ボルクーヤコブセンその他によりジラール『欲望の現象学』の論考をラカンの主体表象の転移と記号論の観点からまとめなおしている。
- 7) ゴルドマン『小説の社会学のために』およびジラール『欲望の現象学』, 355。
- 8) ディケンズがそれを明らかにするのは、この場合、アーサー・クレナムの視線を通してである。窓口の向こう側にいるバーナクルたちは、一人一人、個人的に見れば、ごく普通の人間にみえる人たちである。ただ、問題は、彼らの公人としての義務あるいは己の主たる活動を、単に細分化されたルーティンに限ってしまい、しかもそのために絶望してゆく人々を目の前にしながら、なお、なんら問題を感じず生きている、そうした閉じた意識状態なのである。

アーサー・クレナムが迂遠省を尋ねると、どの役人も書類を差し出し、何番のカウンターにゆけというばかり。あるいは商船のトン数といった細分化した専門領域には反応するが、担当以外のことは一切知らない。彼らにとって仕事とは、ルーティンであり、限られた範囲の数字を扱うこと以外の何物でもない。それで窓口にいってもかくも面白くもない「公的な自分にはめったにならない」でもっぱら「カウンターの背後で猟銃を磨いて」私的な自己に逃げ込んでいるのである (Bk 1, Chap. 10)。週末を過ごすレジャー、あるいはそうした上流階級的自己表象にしか興味がない彼らにとって役所とは自分の社会的立場を確保するための記号でしかなく、さらに互は互いの自己の保証となり、窓口の向こう側の他者は、周縁化されてしまっている。したがって窓口の向こう側の他者に対して応答責任性があるとも当然思えないのである。彼らの人物描写に個性が与えられないのは、それは役所の人種をタイプとして批判するための作家の方法であるともいえるが、事実、縁故で社会的地位が与えられる制度に日常的に依存しきった彼らの内面は、個性などないのであり、あるのは、単調な記号体制に収斂された多数の同一的個体にすぎないのである。目覚めた意識を欠いた主体意識、虚偽的主体欲望のありようをお互い黙認しあっている共犯関係——制度や癒着の問題をまったく改善できない社会の虚偽の元凶をいうのなら、こうした主体欲望の閉鎖性にもあろう。

参考文献

- Borch-Jacobsen, Mikkel and Douglas Brick. *The Absolute Master*. Stanford: Stanford U. P., 1991. 『ラカンの思想——現代フランス思想入門』池田清 訳、叢書ユニベルシタス、1999年。
- Dickens, Charles. *Little Dorrit*. Harmondsworth: Penguin, 1976.
- John Juliet, *Dickens's Villains, Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford: Oxford U. P., 2001.
- Rosenburg, Brian. *Little Dorrit's Shadows: Character and Contradiction*. Columbia: U of Missouri P, 1996.
- 宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』講談社選書メチエ、2001年。
- ジラール、ルネ。『欲望の現象学——ロマンティークの虚偽とロマネスクの真実』古田幸男訳、法政大学出版、1991年。
- 新野緑『小説の迷宮』研究社出版、2002年。
- 松村昌家『ディケンズの小説とその時代』研究社出版、1989年。

(原稿受理 2004年10月1日)